ちひろ美術館・東京
美術館・友の会だより
No.161
2008.12.3

ちひろ生誕90年記念展　ちひろと水墨

●2008年12月3日(水)～2009年1月31日(土)

後援：練馬区／練馬区教育委員会
協力：富山県水墨美術館／原爆の図丸木美術館

西洋で発達した透明水彩を使用し、色彩感あふれる作品を描いたいわさきちひろですが、にじみや余白を生かした描法、絵に対する思想は、むしろ中国や日本の伝統的な水墨画に近いものがあります。

本展では、ちひろの後期の水彩画や、墨と鉛筆による『万葉のうた』『戦火のなかの子どもたち』『赤い蝋燭と人魚』の絵本原画などを、小林古径、竹内栖鳳、都路華香、横山大観、丸木位里の水墨作品とあわせて展示し、ちひろの絵と水墨画に共通する表現に注目します。

ちひろの水彩画と水墨技法との接点

「あやめ」（図１）の花びらは、たっぷりと水を含んだ太い筆で大胆に描かれ、紫の濃淡のにじみが、光に透ける薄い花弁の質感やしっとりと濡れたような感じを出しています。輪郭線は描かれていません。線描を使わず墨や色の面だけで対象を表す「没骨法」という描法が使われています。水墨画でも主に花鳥画に用いられる描法ですが、「チューリップとあかちゃん」（図２）では、ちひろは丸みのある肢体を表すのにも没骨法を駆使して、手首や足のくびれ、口もとにそえられた短い指先の一本一本まで、線を用いず水彩のにじみだけで見事に描き出しています。

「あやめと少女」（図３）には、にじみの効果を利用した「たらし込み」の技法が使われています。最初に塗った墨や絵の具が乾かないうちに、濃淡のちがう墨や他の色をたらして複雑ににじませるもので、俵屋宗達など琳派の絵師が好んで用いた描法です。左上の赤紫と紫のあやめの花には、濃淡のむらや微妙な色合いなど、たらし込み特有の効果がよく出ていて、薄い花弁の質感が感じられます。

一方、小林古径の「牡丹（紅）」（図４）では、枝葉の描写に墨のたらし込みが多用されています。こうして水墨画とちひろの水彩画を見比べると、伝統的な絵画技法からの影響が多分に認められるでしょう。一見何気なく描かれたように見えるちひろの絵ですが、俵屋宗達をはじめ先達の描法に学びながら、自らの技術や表現力を高めていったことが伺えます。

水墨との出会い　ちひろと書

そもそも中国で起こった水墨画は「水暈墨章」と呼ばれ、その名のとおり墨の暈かしによる濃淡とにじみで表現する描法として発達しました。ちひろは正式に水墨画を学んだことはありませんでしたが、18歳のときに書家の小田周洋に師事し、流麗な線で知られる藤原行成流の和仮名の書（図５）を学んでいます。筆の運びや筆圧の緩急などの技術とともに、水や墨の性質を知り尽くすことで水墨画の素養が培われていったのでしょう。

丸木位里からの影響

水墨画において、ちひろに最も直接的な影響を与えたと思われるのが、「原爆の図」などで知られる画家の丸木位里です。

終戦の翌1946年、疎開先の松本から絵の勉強のために東京に戻ったちひろは、丸木位里・俊夫妻の主催するデッサン会に通い、そのアトリエで位里の水墨画（図６）やその制作風景を目の当たりにしています。「位里先生の絵はすごい」とその印象を語っていますが、位里の自由闊達な水墨の扱いに接したことが、後のちひろの画風に大きな影響を与えたことは想像に難くありません。童心社の「若い人の絵本シリーズ」（図７）では物語の余情を、『戦火のなかの子どもたち』では戦火で傷ついた子どもの内面を、水墨的な手法で描いています。色を抑えることで、より深い情感が伝わってくるようです。

伝統的な美意識への共感

ちひろは晩年、世阿弥の『風姿花伝』を愛読し、特に「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」（優れた技術を持った役者の抑えた演技にこそ深い情趣が現れるの意）の一文に共感します。また当時、「惜墨」「捨業」という言葉を画用紙に記しています。説明的な描写をそぎ落とし、ものの本質や心情に迫ろうとする能や水墨画の芸術観は、晩年のちひろの絵の考え方と重なります。水墨画では「気韻生動」が大切だとも言われます。対象を生き生きと表現するよう「気」を込めて描く意味で、ちひろもイメージが固まると一気に筆を走らせました。一瞬の筆でとらえた少女の絵（図８）には、弾むような生命力があふれています。

なお展示室３では、1950年代までのちひろの油彩画を、師事した中谷泰の作品とあわせて展示します。　（山田実穂）

●多目的展示ホール

＜企画展＞ちひろ美術館コレクション展Ⅲ　絵のなかの音

●2008年12月3日(水)～2009年1月31日(土)

私たちの身のまわりには、音があふれています。他方、１枚の絵は寡黙ですが、そこにはさまざまな音を見つけることができます。今回は、ちひろ美術館コレクションのなかから、「絵のなかの音」をテーマに、「音楽」「人の声」「自然のなかの音」に分けて作品を紹介します。

【音楽】楽譜、楽器、演奏者…音楽には多くの要素が含まれています。ユゼフ・ヴィルコン（ポーランド）は、日常の出来事や憂いを黒人たちが歌ったブルースという音楽を、サイやゾウに演奏させています。管楽器のチューバは、よく見るとゾウの鼻とつながっており、深く物悲しい低音が、金色の背景から滲んでくるようです。彼らの憂いはどこからくるのでしょうか。絵の上部には、ポーランド語で「象牙のために殺すことのブルース」と書かれており、死んだ仲間たちへの哀悼の意が感じられます（図１）。今回初出展のピエト・フロブラー（南アフリカ）の作品は、絵本全体が、組曲「動物の謝肉祭」をテーマにしています。さまざまな動物たちと人間が、異なる楽器によって表現されるユーモラスな曲を、動きのある線で、にぎやかに表現しています（図２）。

【人の声】泣き声から笑い声、悲しみも喜びも、声は自由自在に私たちの思いを表すことができます。キアラ・ラパッチーニ（イタリア）の作品は、吹き出しという形を使い、子どもたちの声が表されています。しかし、忙しい両親に、彼らの呼びかけは届いていないようです（図３）。声は時には脅威ともなります。『三国志』に登場する兵士たちの勝利の雄叫びは、長江を越えて、敵にはどのように聞こえたのでしょうか。兵士たちの乗る船の中央では、作戦の成功に笑む孔明たちが盃を交わしています（図４）。

【自然のなかの音】静けさのなかで耳をすませば、鳥のさえずり、風のざわめき、遠くを走る汽車の音、さまざまな音が聞こえます。雪が降る森の奥、穴から一斉に同じ方向に頭を向けるリスやヤマネズミは、どのような春の匂いや、物音を感じたのでしょうか（図５）。

絵のなかの音に、耳を傾けてお楽しみください。　（松方路子）

図1　あやめ　1973年

図3　あやめと少女　1967年

図2　チューリップとあかちゃん　1971年

図5　和服の少女　1971年

「あまつ風　雲のかよひじ　ふきとじよ　をとめのすがた　しばしとどめん」と「あひ見ての　のちのこころに　くらぶれば　むかしはものを　おもはざりけり」の下の句　二首の和歌が書き込まれています。

図4　小林古径　牡丹（紅）　1948年頃
富山県水墨美術館蔵

図8　少女
『ぼちのきたうみ』至光社　1973年

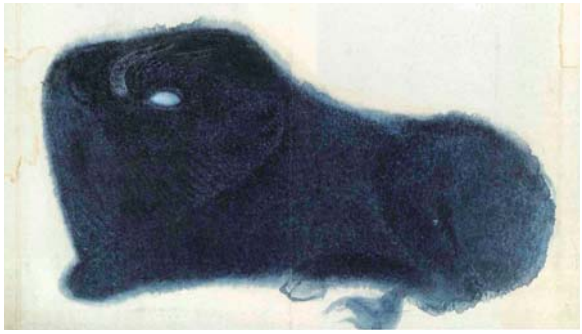

図6　丸木位里　臥牛　1947年頃　個人蔵　原爆の図丸木美術館協力

図7　荒れる海と人魚　『赤い蝋燭と人魚』童心社　1973年

多目的展示ホール

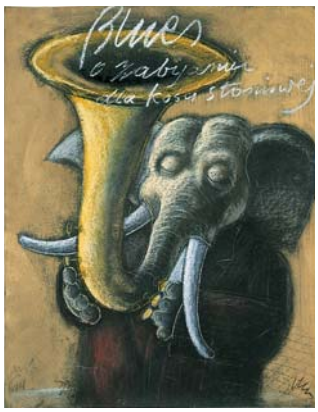

図1　ユゼフ･ヴィルコン（ポーランド）
ブルース・演奏する象　1994年

図2　ピエト・フロブラー（南アフリカ）
「動物の謝肉祭」より　1996年

図5　マーク・シモント（アメリカ）『はなをくんくん』より　1949年

図3
キアラ・ラパッチーニ
（イタリア）
『ねえ　こっちむいて！』より
1999年

図4　于大武（中国）『十万本の矢』より　1997年

なつ！こどもワークショップ報告

夏休み中の毎日曜、小学生を対象に、多彩なワークショップが催されました。前号に引き続き、その模様をレポートします。

●８月24日(日)
「くてくたにんぎょう」
講師：オガサワラマサコ（造形作家）

着られなくなったお気に入りの服で、人形をつくるワークショップ。慣れない針と糸に悪戦苦闘しながら、没頭すること３時間。最後にボタンや毛糸で髪や目をつけて、ついに完成！　思い出のいっぱいつまった服から、世界にたったひとつだけの人形が誕生しました。

●８月31日(日)
「ちひろの絵のひみつ」
講師：ちひろ美術館学芸員

今日描くのは「雨」。まずは目をつぶって、雨の様子を想像してみます。絵本の読み聞かせや原画を見るギャラリーツアーのあとは、いよいよにじみ体験。好きな色を組み合わせ、にじみの模様をつくっていきます。白抜き、もみ紙の技法も体験し、水彩技法を使った思い思いの「雨の絵」が完成しました。

●９月７日(日)
「みんなでダンス！」
講師：伊藤千枝（振付師／ダンサー）

こどもワークショップの最後を締めくくるのは、なんとダンス！　体を自由に動かし、コミュニケーションをとりながら表現するのがねらいです。一番人気だったのは「鏡」遊び。ひとりが「人間」役、残りが「鏡」役になり、「鏡」役は、「人間」役の動きや表情をそっくりに真似しなければならないというのがルールです。互いに触れ合いながら、自由に考え、体を動かし、一緒につくりあげていく楽しさを体感できたひとときでした。　（川口恵子）

10月25日(土)「生誕100年　夢と記憶の画家　茂田井武展」関連イベント
トーク「茂田井とコドモタチ」及川賢治（100%ORANGE）×広松由希子（絵本家）

現代を代表するイラストレーター・100%ORANGEの及川賢治さんと、生誕100年を機に刊行された画集『茂田井武美術館　記憶ノカケラ』の編者・広松由希子さんが、茂田井武の絵の魅力について語り合いました。対談の一部を紹介します。

広松：初めて及川さんとお会いしたとき、どなたかに「好きな絵本作家は誰ですか？」と聞かれて、「シャーリップと茂田井武」と答えていらしたんですよね。すごい組み合わせだと思って。茂田井さんをいつごろからご存知だったんですか？

及川：最初に意識したのは、大学生ぐらいのころ、『キャラメルぼおや』（図１）を見たときです。この３コマ漫画がすごい面白いんですよ。かたつむりを見る真剣な顔と、次の「わぁっ」ていう顔が好きで。その後、実家の引き出しに『セロひきのゴーシュ』が入っているのをみつけて、子どものときにも読んでいたんだなと、ちょっと感動しました。

広松：『茂田井武画集』（JULA出版局）も持ってらして、ときどき開いてみるっておっしゃってましたよね。

及川：あの分厚い画集、誕生日プレゼントで買ってもらったんです。ずっとほしいなぁと思っていて。ふだんはあまり見なくて、迷ったりするときに見るんですけど……勇気づけられるんです。子どものための仕事だと思うと、媚びているような気がするときもあるんですが、茂田井さんの絵を見ると、そういうのが晴れて。茂田井さんの絵に、媚は感じないんですよね。上から目線じゃないからかな。

図１　明治キャラメル広告
＊『キャラメルぼおや』（トムズボックス）収録

広松：大人の側から子どものことを「ほら、分かってるでしょ」みたいに出されちゃうと、鼻白むところもあると思うんですけど、そういうのがない。「自分のなかの子どもが喜ぶ」という感じで描いているのかもしれないですね。

図２「アサノドウブツエン」より　1946年

広松：「アサノドウブツエン」（図２）は戦後すぐのころに描いた、長女のための手作りの絵本です。

及川：完成度がすごいですよね。デザイン的に見てもとてもシャレている。

広松：朝ごはんを待っているうさぎの、怖い顔がいいですね。

及川：どこにも思わせぶりな部分がないというか、ずるいことをしてないというか……。絵を描いていると、ちょっとずるして、「ここに深みを」みたいな演出的な気持ちが出てくるんですけど、茂田井さんの絵には、そういうのがない。

広松：日記を見ると、後悔したり、くよくよ反省するような、自分を責める言葉がすごく多いんですけどね。

及川：あ、本当ですか？それは嬉しい。

広松：これは、亡くなる少し前、「キンダーブック」の絵ですね（図３）。もう筆の動きなどは思うようにいっていないんじゃないかと思うんですけど、頭のなかの再現力はすごいですね。人も動物も、人形も、もちろん人種も、柵がないですよね。寂しいとか悲しいとか、複雑な思いがいろいろあっただけに、「おめでとう」もすごく大切に思っていたという感じがします。

図３「おめでとう」1956年

及川：茂田井さんの世界は、「レトロだね」「懐かしいね」で、終わりにしちゃいけないと思うんですよね。まだ、生々しさがあるというか。

広松：昔を懐かしむっていうよりも、今の自分のなかの何かが、揺さぶられるような感じ。「懐かしい思いはここにある」わけですよね。

及川：それは今もまったく変わってない。

広松：懐かしいではちょっと片付けたくなくて、かわいいけど、かわいいだけじゃなくって。そんな茂田井さんの絵を広く知ってもらいたい思いと同時に、ひとりでひっそり見ていたい思いもあるんです。悲しいものとか、いろんなものも含めて、ずっと好きでいたい。

及川：いやぁ、がんばらなきゃと思うばっかりです。　（上島史子）

ひとこと ふたこと みこと

8月29日（金）
私のなかに眠っていた子どもが目をさまし、キャッキャキャッキャとはしゃぎまわるのを感じました。感謝。（茨城県　大平久美子）

9月14日（日）
生まれも育ったのも練馬区。歩いても30分かからないほどの距離に住んでいるのになかなか縁のなかったちひろ美術館。念願叶って今年の５月に二人の息子と一緒に来て、今日３度目の来館です。なぜもっと早くここに来なかったのかと後悔したほど素敵な空間。ちひろさんの絵はもちろん、建物・お庭・カフェ……どれも私の大好きな要素がいっぱい。中１の息子もここが大好きで、月に２～３回は足を運びたいようです。１つだけ心残りなのは、鳥取にひとりで暮らしている92歳になる祖母を連れてきてあげられなかったこと。祖母はちひろさんの絵の大ファンで、ここへも来たいと言っていたのに……。92歳には見えないほど若々しく元気な祖母ですが、さすがにもう東京へは遊びに来られない、とのこと。先月遊びに行ったとき、ポストカードをプレゼントしたら、とても喜んでくれました。祖母が来られない代わりに……と言ってはなんですが、これからも時間を見つけては、息子と遊びに来たいと思っています。（YUKI）

9月28日（日）
５歳の息子と二人で来ました。息子はちひろの庭に咲く花々に瞳を輝かせ、「美術館のなかに、ちひろの絵が何枚あるか！？」と数えながら見て回っていました。大きくなっても、この絵が素敵だなあ……と感じられる心を持った人になってくれるといいな。今日はとても幸せな一日になりました。
（千葉政宗・千葉悦子）

〈茂田井武展　感想ノート〉

10月4日（土）
引き出しを引くと……絵本が出てくる！　こういう展示方法もあるんだな！　と感心しました。コンピューター彩色やデザインが主流の現在、手描きはひと手間かかるけど、いいなあ。（あださん♂）

10月7日（火）
自然と笑いがこみ上げてきて／行列のうしろからついてゆきたくなって／のん気なはなうたを唄いたくなって／うつくしい色のなかで眠くなって／茂田井武さま、おあいできてよかったです。

美術館日記

9月20日（土）☼
東京・代々木公園で３日間にわたり開催された「ベトナムフェスティバル2008」に参加。ベトナムでのチャリティ出版が決まった『母さんはおるす』『戦火のなかの子どもたち』の絵本や、カレンダーを展示したところ、多くの方が足を止め、スタッフの話に耳を傾けてくださった。ちひろの絵の新たな一面を感じたという方、カレンダーに込めた平和への思いを知り、協力したいと言ってくださった方も。新しい出会いが生まれ、広がっていく手ごたえを感じた。

10月2日（木）☼
ねずみ年のこの秋、美術館スタッフにもあかちゃん誕生が相次いだ。ちひろの絵に出てくるような、愛らしい誕生したばかりのあかちゃんの写真に、思わず笑みがこぼれる。

10月6日（月）☁
雨上がりの午後。茂田井武展レセプションに、ご遺族の方々をはじめ、出版・絵本関係者など60余名が駆けつけてくださった。茂田井の最晩年の力作『セロひきのゴーシュ』の編集を担当された松居直氏のお話が心に残る。「茂田井先生はその仕事ができたら死んでもいいと思うと仰った。私は日本の子どもたちに宮沢賢治と茂田井武の詩の魂をどうしても伝えたいと強く思い、以来ずっとその気持ちを持ち続けています。おふたりは、正に不滅だと思っています」。

10月23日（木）☁
東京女子医大で行われたピエゾグラフ展示についてのアンケートを、職員の方が届けてくれた。「こんなところでちひろさんの絵に出会えるなんて」「受診を待つ間の時間がなごんだ」「ストレッチャーにのり、検査を受ける前にちひろさんの絵を目にし、〝大丈夫、安心して〟と言ってくれた気がした」感謝の言葉の数々に、逆に励まされる気持ち。11月末には「冬バージョン」の絵柄に作品のかけかえをすることになった。たくさんの方に見ていただきたい。

10月25日（土）☁
ここのところ茂田井展関連の雑誌の特集、新聞の記事が相次いでいる。19日には「新日曜美術館」でも紹介され、問い合わせの電話が相次いだ。茂田井展をきっかけに、初めて来館するお客様が増えているのはうれしい。お客様が自分で開けて見られる引き出し式の展示ケースが、絵を見るワクワク感が高まると大好評。

窓

ありがとう、よし恵さん。

松本由理子（ちひろ美術館・東京　副館長）

「山田です。読んだわよ、『ちひろ美術館物語』」。14年前の突然の電話が、よし恵さん（当財団理事長でもある山田洋次氏夫人）との出会いだった。櫛田ふきさんの誕生会や、平塚らいてうの映画を作る会など、さまざまな場でご一緒になるたびに、ひとりでいる私に手を大きく振りながら、「こっちよ、おいで」と、輪のなかに招き入れてくださる、太陽のような方だった。そのよし恵さんが11月８日、病で逝かれた。再入院して10日後の訃報だった。

よし恵さんは「婦人運動は平和運動をもって完了する」との考えに共感し、世界平和を願い続けた人だった。親子読書会を30年も続け、洋次氏がちひろの絵を知ったのも、よし恵さんが講読していた月刊誌『子どものしあわせ』の表紙絵を通してだった。

葬儀の翌日、日本女子大で行われた『母べえ』上映会。よし恵さんが生前、企画したこの会で、洋次氏は「映画は楽しく見るもの。悲しみを抱いた僕が話して、気をそぐのではないかと心配だが、妻の遺言なので今日は来ました」と断りながら、今なぜ『母べえ』をつくったかを語られた。「あの戦争が日本の侵略戦争ではなかったかのような話をする人たちが出てきている。戦場で辛い体験をされた方々が語り継げなくなった今、戦時下で少年時代を過したボクらの世代が語り継がねばならない。野上照代さんの体験を聞き、治安維持法で逮捕された父、代用教員をしながら子どもたちを支え育てた母、ちゃぶ台を囲む家族の姿が浮かんできた。それが描ければ、人々の生活を奪った戦争を描けると」。監督を気遣い、途中参加された吉永小百合さん。「ずっと生き続けて皆さんに観てもらいたい映画。日本がこの先、二度と戦争をしないよう」。映画に込められた平和への願いに、よし恵さんの姿が重なる。ご冥福をお祈りします。

INFORMATION

●次回展示予定　3月1日(日)～5月10日(日)

出版記念展
ちひろ・花の画集

庭に花を育て、花に包まれて暮らしたちひろ。『花の画集』(講談社 2009年3月1日発売予定)の出版を記念し、"花"を集めた展覧会を開催します。「花と子ども」「花のファンタジー」「花の肖像」など、さまざまな角度からちひろが描いた花の魅力に迫ります。

春の花と子どもたち　1965年頃

＜企画展＞ミュンヘン国際児童図書館
架空の絵本展　－世界の絵本画家71人が描いた、本のない絵本－

世界30カ国の71名の画家たちが、自分たちのつくりたい絵本を想像し、その本のための表紙絵を描きました。ドイツ・ミュンヘンの国際児童図書館が所蔵する「本のない絵本」の数々をお楽しみください。

ホアオ・ヴァズ・デ・カルヴァルホ(ポルトガル)
『高速自動車』表紙　2007年

●2009年度　展示予定

5／13～7／12

出版記念展
ちひろの昭和

紙びなと和服の少女
1969年

7／15～9／6

ちひろと
ローランサン

バラ飾りの帽子の少女
1971年

9／9～11／15

出版記念展
ちひろ
いのちの画集

水仙のある母子像
1972年

11／18～1／31

ちひろ
冬の詩(うた)

〈企画展〉
武田美穂展

雪の幻想　1971年

東京館イベント予定

各イベントのお問合わせ・お申し込みは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。http://www.chihiro.jp/tokyo/event.html

●12/14(日)　ちひろ生誕90年　記念感謝デイ

2008年は、いわさきちひろの生誕90年にあたる年。お祝いと感謝の気持ちを込めて、イベント盛りだくさんの感謝デイを開催いたします。皆様お誘い合わせの上、ぜひご来館ください。

入館料無料！
どなたでも無料でご入館できます。

プレゼント！
○先着500名に「りんごと天使」ポストカード(非売品)プレゼント
○当日90人目、190人目、290人目……の来館者にプレゼントあり
○カフェご利用の方にドリンク券贈呈(次回来館時から利用可)
○ショップご利用の方に10%割引券贈呈(次回来館時から利用可)

イベント
○14：00～15：00
ボサノヴァユニットSapatos
ワンコインコンサート
○15：30～松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)トーク

●ピエゾグラフ作品による「いわさきちひろ展」開催

福井県武生(たけふ)生まれのちひろ。生誕90年を祝い、福井県のアンテナショップ「ふくい南青山291」にて、ピエゾグラフ作品による「いわさきちひろ展」を開催します。母・文江の武生での女学校生活に関する資料、ちひろの言葉や写真なども展示。
会期中、松本猛の講演会も行います。

○会期：12月15日(水)～12月28日(日)
○会場：ふくい南青山291
　2F多目的ホール
○入場料：大人300円、高校生以下・65歳以上無料
○お問合わせ：ふくい南青山291
　TEL：03－5778－0291

松本猛講演会
○日時：12月20日(土)　16:00～
○会場：ふくい南青山291
　2F多目的ホール
○参加方法：12月初旬より、「ふくい南青山291」ホームページ(http://fukui.291ma.jp/)にて案内予定

●年末年始・冬期休館のお知らせ

ちひろ美術館・東京は、2008年12月28日(日)～2009年1月1日(木)まで休館、新年は2日より開館いたします。2009年2月1日(日)～28日(土)までは、館内整備のため冬期休館いたします。

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14：00より、展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話します。12月17日(水)、1月21日(水)は松本猛(安曇野ちひろ美術館館長)がお話します(参加自由)。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11：00より、展示や季節にあわせて、絵本の読み聞かせなどを行います(参加自由)。※授乳室もご利用になれます。

●新商品紹介

ちひろWORLD

映像と音声でちひろの世界を楽しむDVD2巻をはじめ、紙芝居カード・ぬり絵カード・解説書が入った、親子で楽しめる充実のDVD+BOOKが完成しました。

○内容
・DVD2巻　ちひろの世界
　(上巻…代表作品60点の映像紹介／下巻…絵本朗読、技術解説他)
・紙芝居カード30枚
・ぬり絵カード5枚
・解説書
○価格：7,980円(税込)

●友の会交流会のお知らせ

恒例の友の会交流会は、ただいま企画中です。
詳細が決まり次第、別途ご案内をお送りいたしますので、どうぞお楽しみに！

CONTENTS

〈展示紹介〉ちひろと水墨 /絵のなかの音……❷❸　〈活動報告〉なつ！こどもワークショップ報告／トーク「茂田井とコドモタチ」及川賢治(100%ORANGE)×広松由希子(絵本家)……❹ひとことふたことみこと／美術館日記／窓…❺

美術館／友の会だより　No.161　発行2008年12月3日

ちひろ美術館・東京

〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2　テレホンガイド03-3995-0820 Tel.03-3995-0612　Fax 03-3995-0680
http://www.chihiro.jp/　E-mail:chihiro@gol.com